

『草枕』 蚤と蚊と蟹

Junko Higasa 2014.7.10

那古井の宿の、画工と那美さんの会話。『こういう静かな所が、かえって気楽でしょう』『気楽も、気楽でないも、世の中は気の持ちよう一つでどうでもなります。蚤の国が厭になったって、蚊の国へ引越しちゃ、何にもなりません』『蚤も蚊もない国へ行ったら、いいでしょう』『そんな国があるなら、ここへ出して御覧なさい。さあ出して頂戴』と女は詰め寄せる。『御望みなら、出して上げましょう』と画工は画に描く。那美さんは『まあ、窮屈な世界なこと、横幅ばかりじゃありませんか。そんな所が御好きなの、まるで蟹ね』といて退けた。

蚤も蚊も人の血を吸う。「そうでない国があるもんですか」というのは「女」である。女にとって、その人生を所有物のように扱う男社会は蚤と蚊の国である。そして同時に、男にとっては戦争の流血を吸収する「人でなし」の国である。

画工が描いた世界は、蟹の住む世界である。蟹は窮屈な世の中に、幅広く並んだ国民の姿である。

女は男社会のどこへ越しても住みにくい。「そうでない住みやすい国があったら出して頂戴」あるはずがない。「出して上げましょう」と、男が代わりに出したのは、戦争に行かない男たちが私利私欲であくせく競争する小さくて窮屈な囲いの中の世界である。

どこへ越しても住みにくいと悟った那美さんは、大徹和尚に「人の世」につなぎとめてもらっている。